

Title	キャロル・ギリガンの方法 : コールバーグ、フロイト、そしてアンネ・フランク
Author(s)	田中, 壮泰
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2025, 7, p. 30-41
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/100156">https://doi.org/10.18910/100156</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

特集2 第12回臨床哲学フォーラム（シリーズ：ふるいにかけてられる声を聴く）  
 テーマ「キャロル・ギリガンとケアの倫理」

## キャロル・ギリガンの方法

—コールバーグ、フロイト、そしてアンネ・フランク

田中 壮秦

はじめに

『抵抗への参加』(*Joining the resistance*, 2011) の翻訳を、共訳者の小西真理子さんから依頼され、引き受けることになったのは、二〇一八年のことである。そのとき、本書のオリジナルを一読した私は、キャロル・ギリガンという人が、あまりに自由な書き方をする研究者であることに驚いたのを覚えている。

例えば、「ある学生さんが彼女の指導教授である教授さんのもとを訪ねてきました」(a Student came to her adviser, the Professor) というふうに語られる本書の第二章「わたしたちはどこから来て、どこへ向かうのか」は「寓話」の形式が採られているし、それぞれト書きのついた四つの「幕」(act) からなる第三章「自由連想と大審問官——ある精神分析のドラマ」は、言うまでもなく、「演劇」の形式が採られている。万事そんな具合で、これは心理学の本としても読めれば、一種の文学的創作物としても読むことができそうだった。だから、文学研究者である私に、小西さんは本書の共訳を持ちかけたのである。

研究者としてのギリガンのキャリアもまた自由奔放である。彼女の最初の単著であり、主著とみなされることの多い『もうひとつの声で』(*In a different voice*, 1982) を書き上げたあと、ギリガンは小説や戯曲の創作に挑戦している。二〇〇二年には息子と共同でナサニエル・ホーソーン『緋文字』(1850) に基づく戯曲を書き、二〇〇八年には単著としては三作目になる『キラ』(*Kyra*) という小説で作家デビューを果たしている。どうやらギリガンは、心理学と文学を結びつける何らかの方法を模索しているようだったが、正直に言うと、私はそこにどのような生産的な意味があるのかわからなかった。ひねくれた見方をすれば、ハーヴァード大学の先生だから許される遊びに過ぎないのではないか、とも思われた。

しかし、翻訳を続ける中で私に見えてきたのは、一見自由奔放に見える彼女の研究のスタイルが、彼女が直面してきたさまざまな不自由への抵抗として選ばれてきたということである。単なる遊び（もちろん彼女の仕事にそういう側面はあるし、あっても何も悪くはない）ではなく、何らかの問題意識に基づいているということである。

そこで、以下では『もうひとつの声で』から『抵抗への参加』へと至るギリガンの研究のプロセスを、心理学と文学の両面からたどることで、その自由奔放とも形容できそうな彼女の研究スタイルから、一貫した問題意識の所在を探ってみたい。

## 1 「仮説のジレンマ」と「現実のジレンマ」

そもそも心理学者としての出発点から、ギリガンは不自由な環境と戦わざるをえなかった。男たちによって主導されてきたこれまでの心理学における女性蔑視を批判しなければ、彼女は前に進むことができなかつたのである。

いや、心理学者になる前から、ギリガンは自由のために抵抗し続けていたとも言える。「政治の季節」の真っ只中に学生時代を過ごした彼女は、公民権運動、ヴェトナム反戦運動、第二波フェミニズム運動をはじめ、可能な限り数多くの政治運動に関わろうとした。中間選挙を間近に控えた一九六二年には、当時、夫の都合で移住していたクリーヴランドで、育児に専念していたという彼女は、ベビーカーを押しながら貧困地区に住む黒人たちの家を訪ね歩き、有権者登録の呼びかけを行なったという<sup>1</sup>。ギリガンが心理学と出会うのは、そうした政治運動の延長線上でのことであつた。

程なくして、ハーヴァード大学の博士課程を修了したギリガンは、同大学でローレンス・コールバーグの助手として教鞭を執り始めるが、そもそも彼女がコールバーグに惹かれたのは、彼が提唱した道徳性発達理論が、「公民権のために行動を起こし、不当だと思われた戦争に抗議するわたしや同世代の多くの仲間たちにとって、その原動力であつた正義のための情熱をうまく言い表してくれていた」<sup>2</sup>からだという。心理学はギリガンにとって、いや、彼女だけでなく当時の多くの若者たちにとって、政治と切り離すことのできないものとしてあつたのである<sup>3</sup>。

しかし、ハーヴァード大学に着任早々、ギリガンはコールバーグの仕事に疑問を抱くようになる<sup>4</sup>。彼が対象にしているのは、あくまで「仮説のジレンマ」(hypothetical dilemmas) に対峙したときに示される人びとの道徳性に過ぎないのではないかと彼女は考えた。

コールバーグは道徳性の発達レベルを測る方法として、二つの道徳規範のうち、どちらか一方の妥当性を被験者たちに語ってもらうという方法を採用した。その一つに「ハインツのジレンマ」と呼ばれる設問がある。死に瀕した病気の妻を救うために、治療薬を買うだけの経済力のない夫(ハインツ)が薬を盗むことを決意するが、それが

<sup>1</sup> 当時、育児に従事する傍ら、ギリガンはダンサーとして老舗の黒人劇場「カラムハウス」に通っていたが、その劇場は貧しい黒人たちが集住する地区に位置し、「昼は工場で働き、夜にダンスをする人たちが少なくなかつたという。Gilligan, C. (2009, September 15). Interview by L. Granek [Video Recording]. *Psychology's Feminist Voices Oral History and Online Archive Project*. New York, p. 3.

<sup>2</sup> キャロル・ギリガン『抵抗への参加』小西真理子・田中壮泰・小田切建太郎訳、晃洋書房、2023年、2頁。以下、本書からの引用は頁数のみを本文中に記載する。

<sup>3</sup> 政治思想家としてのギリガンについては、岡野八代『ケアの倫理—フェミニズムの政治思想』(岩波新書、2024年)を参照せよ。

<sup>4</sup> もっとも、彼女は一九七一年にコールバーグとの共著論文「哲学者としての青年：ポスト慣習世界における自己発見」(The Adolescent as a Philosopher: The Discovery of the Self in a Postconventional World)を書いている。しかし、「この論文の大部分はコールバーグによって書かれた」という。金曙輝「「ケアと正義」の再考—C.ギリガン対L.コールバーグ論争を中心に」(東京大学大学院教育学研究科基礎教育学研究室『研究室紀要』第38号、2012年)を参照のこと。

正しい判断であったかどうかを問う、というものである。要するに、法に従うべきか、法を破ってでも他人の命を救うべきかという、二つの当為（「べきである」）のうち、どちらがより理に適っているかを説明する能力が、そこでは求められた<sup>5</sup>。被験者たちは、その説明の内容に応じて、数段階に区分された道德性の発達段階のどこかに分類されることになるのである。

しかし、そこで計測できるのは、自分とは関係のない人間に降りかかった抽象的な問題（したがって、自分の事柄になると生じざるをえない人間関係のさまざまな<sup>しがらみ</sup>複雑な感情に悩まされることがない）について考える能力であって、「現実のジレンマ」（real-life dilemmas）においては、コールバーグとは別の観点から人びとの道德性を捉える必要がある、とギリガンは考えた。それどころか、コールバーグの枠組みは、とくに若者に対して抑圧的に働くこともあるがゆえに、批判すべき対象ともなった。

『抵抗への参加』の中で、ギリガンはこんなエピソードを伝えている。一九七〇年、ケント州立大学でベトナム戦争に抗議していた大学生たちが陸軍州兵に射殺されるという事件が起きた。同じ頃に、ギリガンは大学の教室で男子学生たちに兵役拒否の倫理について質問したところ、「ベトナム戦争の不正義については話したがるのに」、この話題に関しては誰もが口をつぐんでしまったという<sup>6</sup>。当時を振り返りながら、ギリガンはこの状況をこう説明している。男子学生たちは、「自分が本当に考えていること、すなわち関係性と感情にある程度左右される兵役拒否に関する自分の考えを口にすると、女っぽいと思われるし、道德的発達段階が低いとみなされることに気づいていた」（25、一部修正）というのである。

当時はまだ「ジェンダーというものがまったく見えていなかった」（26）というギリガンが、男子学生たちの沈黙に女性蔑視を読み取っていたかどうかはわからない。単にコールバーグの研究の限界をそこに見ていただけだったのかもしれない。いずれにせよ、この日以来、彼女は兵役を目前に控えた男子学生たちのジレンマをめぐる研究に着手している。ところが、一九七三年にニクソン大統領が徴兵制を廃止し、その同じ年に米国で人工妊娠中絶が合法化されたことで、彼女は研究の対象を変更せざるをえなくなり、新たに「妊娠を継続するか、中絶するか」の選択に直面した女性たちのジレンマをめぐる研究を開始することになる。「男性に関する研究としてはじめてものが、いつしか女性を対象とする研究になっていた」（26）のである。こうして書かれたのが、『もうひとつの声で』であった。

ギリガンは『もうひとつの声で』の中で、女性の道德的判断を分析した先行研究を紹介しながら、男性とは違って女性の多くが、「仮説のジレンマではなく現実のジレンマを解決したいと思っている」<sup>7</sup>のだと指摘している。人間一般ではなく個人的な問題

<sup>5</sup> なお、ギリガンはコールバーグの死後十周年を記念したレクチャーの中で、一九七一年にコールバーグが書いた論文のタイトル（From “Is” to “Ought”）に引っかけて、「彼は「べきである」（ought）に焦点を当てたが（中略）自分は「ある」（is）に関心があった」と述べている。ギリガンとコールバーグは研究上の対立はあったものの、プライベートでは終生の友であり続けた。C. Gilligan, "Remembering Larry." *Journal of Moral Education* 27, no. 2 (June 1998), p.6.

<sup>6</sup> Gilligan, *Ibid.*, p. 3. 同様の言及は『抵抗への参加』（25頁）にもある。

が、何よりもまず解決すべき問題として、多くの女性にはのしかかっているのである。

例えば、「二〇代後半の音楽家エレン」にしても、「二九歳の既婚女性で、一人の未就学児の母親」であり「大学院の学位取得」を目前に控えていたルースにしても、いずれにとっても子供を産むということは、これまで頑張ってきた学業や職業の道を諦めることを意味した。「ケアをせよという強制命令」が女性たちばかりに押しつけられるからである（『もうひとつの声で』第三章を参照）。問題の根底には、出産後の子供の養育を含む、ありとあらゆるケアを女性に押しつけてきた性別役割分業の体制があった。

こうして、男たちが主導してきたこれまでの心理学への批判として出発したギリガンの研究は、やがて、より大きな枠組みである家父長制に対する批判としても展開していくことになる。

## 2 「解離」と「自由連想法」

ここでもう一人、コールバーグと並んでギリガンがもっとも影響を受け、乗り越えるべき存在でもあった「権威」として、ジークムント・フロイトの名前を挙げておきたい。というのも、『もうひとつの声で』以降のギリガンの仕事は、フロイトの方法を批判的にアプロプリエイトしてきたプロセスとしてもたどることができるからである。

すでに『もうひとつの声で』の中で、ギリガンはフロイトへの批判を展開している（育児を女性の務めとしてきた家父長制の歴史を捉え損ねているとして、彼女は「エディプス・コンプレックス」の枠組みを批判した）<sup>8</sup>。しかし、その後も彼女は繰り返しフロイトに立ち返っており、例えば、彼女の単著としては二作目になる『喜びの誕生』（*The Birth of Pleasure*, 2002）は、少女時代のギリガンと母親との関係を問い直した自伝的なエッセイとなっているが、同時にそれはフロイトの向こうを張る試みとしてもあった。

その中でギリガンは、男の子が母親への愛情を断ち切り、健全な性愛関係へと至るための「禁止」の物語として、オイディプスの神話を読み替えたフロイトに対抗して、それとは反対に「見るな」という禁止を破ることで、最終的に結ばれることになる男女の愛を描いたキューピッドとプシュケーの神話に、家父長制的な枠組みを越えた、もう一つの新しい関係性のあり方を読み取っている<sup>9</sup>。タイトルの「喜び」とは、直接的にはキューピッドとプシュケーとのあいだに生まれた子供の名前を指している。

しかし、フロイトはギリガンにとって、乗り越えるべき存在であったと同時に、自分の研究のお手本とすべき存在でもあった。とくに初期のフロイトの仕事を、彼女は高く評価した。

<sup>7</sup> キャロル・ギリガン『もうひとつの声で』川本隆史・山辺恵理子・米典子訳、風行社、2022年、188頁。

<sup>8</sup> なお、言うまでもないことかもしれないが、フロイトに対するギリガンの批判的読解は、カレン・ホーナイン、ナンシー・チョドロウ、リュス・イリガライなど、女性の精神分析家たちの仕事に多くを負っている。

<sup>9</sup> 例えば、そこにはこう書かれている。「プシュケーとキューピッドの神話が民主主義を照らす星(polestar)で、自由と男女平等への道を示す物語で、喜びの誕生の条件だとすれば、オイディプスの悲劇は家父長制を導く星(lodestar)である」。C. Gilligan, *The birth of Pleasure*, Alfred A. Knopf, 2002, p. 226.

ギリガンがフロイトの批判的読解に本格的に取り組んだ最初の論文とも言える、『抵抗への参加』の第三章は、「エディプス・コンプレックス」以降のフロイトを批判しながら、他方で、「解離」(Dissoziation)と「自由連想法」(freie Assoziation)という二つの重要な発見を成し得たがゆえに、初期のフロイトの仕事を持ち上げるという議論を展開している。「自由連想法」については、「火を発見することに相当するもの」(106)とまで述べているほどである。

フロイトが「解離」を発見するのは、一九世紀末のことである。その頃、神経症に悩む(主に女性の)患者の診断を始めていた彼は、患者たちが、本当は自分の症状の原因を知らないのではなく、何らかの理由で「知るのは嫌だ」と抵抗していることに気づいた。彼女たちの症状が、「知っていることを知らないことにしてしまう、意識の切り離し」(110)、すなわち「解離」と関係していることを彼は突き止めるのである。

しかし、知っているのに知らないことにしている何事かを患者たち自身に語ってもらうには、特別な方法が必要だった。最終的に、フロイトは患者たちの額に手を置き、彼女たちの内部で自制が働かないよう、頭に浮かんだことを何もかも自由に語ってもらうという方法を編み出した。これが「自由連想法」である。あくまでフロイトは、女たちが自分の声と言葉で、自分の経験を語るができるようサポートすることに徹したのである。

その結果、女性たちの口から、これまで隠されてきた事実が明るみに出るようになった。なかでもフロイトを驚かせたのは、彼女たちの多くが、子供の頃に大人の男たち、それも大抵が自分の父親から性的虐待を受けたことがある、と証言したことである<sup>10</sup>。

性暴力の問題は、本来は加害者が恥じ入らねばならないのに、被害者のほうが恥の意識を抱え、沈黙を余儀なくされてきたがゆえに、過去も現在も、その多くが、現実にはなかったことにされてきた。加害者が実の父親であれば、なおさらその体験は恥の記憶として抑圧されることになるだろう。もっとも弱い立場に置かれた者たち(ここでは女性と子供たち)が沈黙を強いられる構造が、家父長制と呼ばれるものである。フロイトは「自由連想法」を考案したことで、はからずも家父長制のおぞましさと向き合うことになったのである。

ギリガンによれば、「初期の仕事のなかでフロイトが直面した課題は、父の声を放棄することだった」という。

ひとりの医師として権威を求めたフロイトであったが、自分の方法を押し通すためには、その要求をあきらめなければならなかった。彼の強みは方法——連想を解放するための方法——を知っていることにあった。しかし、自分の苦しみを知っているのは患者だけであった。(111)

<sup>10</sup> その一例として、『ヒステリー研究』(1895)には、父親から受けた性的トラウマ体験を抱えるカタリーナという女性が紹介されている。ただし、本文中では彼女を誘惑したのは父親ではなく、おじとして描かれ、フロイトは一九二四年の補遺の中で、それが本当は彼女の父親であったことを明かしている。ブローカー／フロイト『ヒステリー研究<初版>』金閣猛訳、中公クラシックス、2013年、210頁。

実際にフロイトは「父の声」を放棄しようとした。患者たちの「知っていること」をまずは事実として受けとめ、幼少期の性的なトラウマ体験を神経症の起源に位置づける、いわゆる「誘惑理論」(Verführungstheorie)を提唱しさえした。しかし、程なくしてフロイトは患者の声に耳を塞いでしまう。彼女たちが語ったトラウマ体験は現実起きたことではなく、「空想」(Phantasie)の産物だと捉えるようになるのである。

このときに登場するのが、「エディプス・コンプレックス」の枠組みである。フロイトは男の子の発達の起源に、母と結ばれたいと願い、父と対立することで抱える内的葛藤を位置づけた。最終的に男の子は父による禁止(それをフロイトは「去勢不安」として説明する)を受け入れ、母との関係を断ち切ることで、健全な性関係に向かうことになる。つまり、家族からの自立を目指すようになる。他方、ペニスを持たない女の子には禁止が強く働かないため、彼女たちは「エディプス・コンプレックス」からなかなか抜け出すことができない。つまり、近親姦の物語を抱えたまま成長することになる、とフロイトは考えた。

これ以降、患者たちの語りはもはや必要とはされず、解釈者であるフロイトが彼女らに代わって語ることになるだろう。「自由連想法」を考案したことで、患者とともに自らも家父長制からの解放に向けて歩み出したかに見えたフロイトであったが、早々に彼はそこから後退してしまった、というのが『抵抗への参加』第三章におけるフロイト批判の要諦である。コールバーグのときと同様に、フロイトへの批判においてもギリガンは、「仮説」の精緻化にかまけて、女性たちの「現実」(ここでは性的トラウマの問題)に蓋をする男性研究者たちの理論偏重を問題にしていた。

ところで、ギリガンが「自由連想法」を評価する際に、それをフロイトと患者たちとのあいだの一種の相互ケアの営みとして捉えていた点は注目に値するだろう。というのも、心理学者としての彼女自身の仕事も、そういう側面を持っていたからである。

『もうひとつの声で』を出版したあと、ギリガンは思春期の少女たちを対象とした新たな研究に取り掛かっている。そして同じ頃に、自己分析を開始したというギリガンは、「自由連想法を通して、また、自分の分析家の助けを借りて、わたしは自分のなかにある解離を打ち消していくと同時に(中略)研究対象の少女たちが語るのを、一語一語忠実に聞き取りながら、彼女たちのなかで解離のプロセスがはじまる現場に立ち会って」(101)たと書いている。つまり、少女たちの声に耳を傾けながら、同時に、自らの内部にある少女の声を発見してゆくプロセスとして、それはあった。

ギリガンによれば、思春期(とりわけ一二歳から一三歳にかけての時期)に少女たちは、「家父長制におけるジェンダー・コードとその慣習の制度的な強制にさらされる」(49)がゆえに、それ以前の自分の声と周囲から期待される声との間で葛藤を抱えることが少なくないという。この葛藤のさなかに、少女たちが示す道徳性に光を当てることが、『もうひとつの声で』を書き終えたあとのギリガンの新しい課題となった。

遡れば一九八一年、『もうひとつの声で』を刊行する前年に、ニューヨーク州にある私立の女子高校であり、米国で最初に設立された女子のための高等教育機関としても知られる、エマ・ウィラード校の教職員から、ギリガンはハーヴァード大学の何人かの共同研究者たちとともに、この学校に在籍する女子学生を対象とした、女子の発達

をめぐる聞き取り調査を依頼されている。ウーマン・リブ以降の女性の変化に合わせて、同校はカリキュラムの大幅な改革を目指していた。

新たな研究対象として、ギリガンが思春期の少女を選択したのは、直接的にはこの依頼を引き受けたことがきっかけとなったが、そのテーマが当時の心理学の「欠落」の一つであったこともそこには関係している。例えば、一九八〇年に刊行された『青年期心理学ハンドブック』(*Handbook of Adolescent Psychology*)には、「思春期の少女は、これまでほとんど研究されてこなかった」と書かれていたという<sup>11</sup>。

しかし、この研究には、いくつもの困難がともなった。参照できる先行研究がほとんどなかったし、思春期に少女たちのどこがどう変化したのかを知るには、長期間にわたる調査が必要だった。何よりも難しいのは、この時期に少女たちは周囲に適応する必要から、自分の声を抑え込んでしまう傾向があるため、少女たちの発話だけでなく、言い淀みや沈黙も含む、声ならぬ声を相手にしなければならなかったことである。しかも、それはギリガン自身が経験していたことでもあった。彼女も一人の大人の女である前に、一人の少女として思春期に家父長制への通過儀礼を潜り抜けているはずなのである。少女の研究は、ギリガンに自分自身と向き合うことも要請した。

このとき、相互ケアとしての「自由連想法」が役に立った。ギリガンは聞き取り調査で得た少女たちの声を、彼女の声にしてしまわないために、つまり、できるだけ操作を加えないために、思いつくままに書き出そうとする。少女に対してではなく、ギリガンは自らに、「自由連想法」を施したということである。少女たちから声を引き出す前に、まずは自分自身が、少女の声を取り戻す必要があったからである。

### 3 失われた声を求めて

『抵抗への参加』の第三章の中で、ギリガンは子供を対象とする研究を始めた頃に、「連想の流れにしたがって、現代のアメリカに生きる子供たちの声と、時代と文化を越えて芸術家たちが記述してきた声（エウリピデスの悲劇のイピゲネイアやシェイクスピアの『十二夜』のヴァイオラから、ツイツイ・ダンガレムハの『ナーヴァス・コンディション』のタムプ、トニ・モリスンの『青い眼が欲しい』のクローディアまで）のあいだの共鳴を拾いあげてきました」（102）と書いている。つまり、「自由連想法」は子供たちの現実の声と文学に描かれた声とを結びつける方法としてもあったのである。

もともとギリガンは、文学によく言及する心理学者であった<sup>12</sup>。『もうひとつの声で』

<sup>11</sup> C. Gilligan, "Prologue", In C. Gilligan, N.P. Lyons, T.J. Hanmer (Eds.), *Making connections: The relational worlds of adolescent girls at Emma Willard School*, Harvard University Press, 1990, p. 1.

<sup>12</sup> 文学研究者の立場からギリガンについて語ったものとしては、『ケアの倫理とエンパワメント』（講談社、2021）をはじめとする小川公代の仕事がある。また、岡野（前掲書、第四章）は、論文「道徳の志向性と発達」(Moral orientation and moral development, 1987 / 小西真理子による日本語訳は『生存学』vol. 7, 2014, 229-244頁に収められている)の中で展開された、ギリガンによるスーザン・グラスベルの短篇「女だけの陪審団」(1917)論を紹介している。ギリガンの作家としての仕事については、東京大学大学院教育学研究科・基礎教育学研究室『研究室紀要』第36号、2010年、85-89頁に掲載された、金暁輝による『キラ』論を参照せよ。



においても、ジョゼフ・コンラッドの『闇の奥』(1902) やトニ・モリスンの『ピラヴド』(1987) など、文学作品の名前がちらほらと登場していたが、とりわけ少女の研究に着手した頃から、彼女の文学への関心は、より一層高まったように思われる。小説や戯曲の創作を手がけもした。もちろん、彼女が学部時代に英文学を専攻していたことが、そこには関係している。しかし、それだけではなく、少女の研究を進める上で直面したさまざまな困難も、そこには関係していた。なにしろ、文学は少女の声の貯蔵庫として、心理学における先行研究の「欠落」を補う上でも役に立ったのである。

例えば、エマ・ウィラード校における長年にわたる調査の集大成として、ギリガンは一九九〇年に、同校の創立一七五周年を記念した論集『つながりをつくる——エマ・ウィラード校における思春期の少女たちの関係性の世界』を刊行しているが、そこに彼女は、「シェイクスピアの姉妹を教育すること：女の思春期の地下からの覚書」と題した論文を寄せている<sup>13</sup>。

競争よりも関係性に重きを置いた、これからのあるべき女子教育について論じたものだが、その中でギリガンは、『テンペスト』(戯曲の初出は1623年) に描かれたミランダの姿に、大人たちから自分の意見を聞いてもらえず、声を発することさえ許されない、現代の少女たちの経験を重ね合わせている。物語の冒頭部分で、弟への復讐を計画していたプロスペローの行動に、疑問を投げかけた娘ミランダは、父から「これ以上なにも訊くな」(Here cease more questions) と制止されるのである。男性作家が書いた文学作品の中にも、少女のリアルな経験を読み取ることができることを証明してみせたこの論文は、文学作品に対するフェミニズム批評の模範的な実践とも言えるだろう。

ところで、ギリガンは大学で英文学を学んでいたこともあって、シェイクスピアやホーソンなど、彼女が好んで言及する作家たちの多くは英語圏の作家であったが、必ずしも英語にこだわっていたわけではなく、ブルーストやドストエフスキーなど、しばしば英語圏以外の作家にも言及している。もちろん、男性作家を特別視することもなく、彼女の研究には、女性の経験を知るもっともよい材料の一つとして、シャーロット・ブロンテやヴァージニア・ウルフ、マーガレット・アトウッドなど、女性作家たちが書いたものが、よく顔を覗かせている。さらに、トニ・モリスンやジャメイカ・キンケイドなど、黒人文学にも彼女が目配りを利かせている点は注目し得るだろう。そして、小説だけでなく、詩や日記も彼女は愛読しており、なかでもアンネ・フランクの日記は、ギリガンがもっともよく言及するテキストの一つになっている。

一九八〇年代後半から九〇年代初頭にかけて、思春期の少女たちの聞き取り調査を進めるなかで、テキストからも少女の声を読み取ろうとしていたギリガンにとって、同じ頃に英訳が刊行されたアンネの日記の校訂版との出会いは、まさに運命的とも言える出来事であったに違いない。アンネの日記が特別なのは、単にそれが(そもそもそんなものが本当にあるとしてだが)「ノン・フィクション」であったからではない。

<sup>13</sup> C. Gilligan, " Teaching Shakespeare's Sister: Notes from the Underground of Female Adolescence ", In *Ibid.*, pp. 88-109.

それは、アンネが公開用と自分用とで日記を書き分けていたことが、このときに明らかになったからである。思春期の少女が示す特徴的な行動の一つとして、ギリガンがもっとも注目していたのが、まさにこれと同じ、声の使い分けであった。ギリガンはこう書いている。

アンネ・フランクが日記を編集したこと、そして、実際の日記と彼女の手になる編集版の日記のほとんどが残っており、一九八九年に校訂版として出版されたことを、オランダの若手の学者デニーゼ・デ・コスタから教えてもらったとき、わたしは、自己編集のプロセス——これは、わたし自身の内部にあることを知っていたし、少女や女たちとの研究でも観察してきたものです——が、歴史の網にわかり、琥珀のなかの化石のように保存されていることに気づきました (202-203)。

アンネの日記が『うしろの家』(*Het Achterhuis*) のタイトルで最初にオランダで刊行されたのは一九四七年のことだが、それから現在に至るまで、この日記には少なくとも二度、重要な校訂が行われている。

アンネの遺品を管理していたのは、フランク家で唯一ホロコーストを生き延びた父オットーだが、一九八〇年に彼が死亡したことで、アンネの書いたものはすべてオランダ国立戦時資料研究所に寄贈されている。これによって初めて、アンネの日記にはオリジナルのテキストと公開を目的としてアンネ自身が編集したもの、そして父オットーがそれにさらに手を加えた再編集版の三種類が存在していたことが判明した。それらの異同を検討した批判校訂版が、同じオランダの研究所から刊行されるのが一九八六年で、それがオランダ語から英語に翻訳されるのが、その三年後の一九八九年になる。

その翌年、一九九〇年にミシガン大学で「タナー講義」を行なったギリガンは、そこで中心的に論じるテキストの一つとして、アンネの日記を取り上げている。

実は、この講義には「抵抗への参加」というタイトルが付いていた。これが、およそ二〇年後に刊行される彼女の単著のタイトルになり、この原稿を書き直したものが「抵抗をアイデンティファイする」<sup>14</sup>とタイトルを変え、『抵抗への参加』の第四章に収録されることになるのである。

ところで、アンネの日記は一九五二年に最初に英訳され、その数年後にブロードウェイの劇やハリウッド映画にリメイクされたことで世界的に広く読まれることになるが、それらが依拠していたのは、どれも父オットーが検閲した日記のほうであった。原テキストが発見された八〇年代以降、アンネはプロパガンダ的に大人たちによって作られた、ホロコーストの犠牲者としてのシンボル（まさにブロードウェイやハリウッド

<sup>14</sup> 私は第四章のタイトル"Identifying the resistance"を「抵抗を識別する」と訳したが、今は「抵抗を取り戻す」か「抵抗と自己同一化する」と訳したほうがよかったと思っている。『抵抗への参加』の中で、ギリガンは少女たちの声に抵抗を聴き取り、そこに参加するよう読者に呼びかけたが、それは大人たちが自分の内部に埋め込まれた子供の声と「自己同一化」することをも意味したからである。

が強調したのが、そのようなアンネ像であった)としてではなく、一人の等身大の少女として受け止められるようになった。セックスやジェンダーの問題に強く興味を示した思春期の少女ならではのアンネの姿は、このとき以降、知られるようになる。

「原爆の子の像」や「慰安婦像」など、具体例を挙げるまでもなく、アンネ以外にも数多くの少女たちが、これまでに国家や民族の象徴としての役割を押し付けられてきたことを、私たちは日常的に知っている。

オリジナルの日記では性的な関心について自由に書いたアンネが、公開用の日記ではそれを削除しなければならなかったのは、彼女もまた、大人たちが少女をどのように見たがっているのかを、よく知っていたからである。

これと同様に、ギリガンが聞き取り調査を行った少女たちも、自分の身体と性をめぐって、周囲が押しつける理想の姿と現実の欲望とのあいだのズレに苦しんでいた。

例えば、ギリガンと二人っきりの場面では、「自分の体について話そうとするアンネ・フランクの、あのためらいがちだが毅然とした書きっぷりにどことなく似た口調で、性的な欲望についてあけっぴろげに語」(181-182) ったという一四歳のロージーは、母親との関係に話題が及ぶと血相を変え、「だって、お母さんはわたしに対してとてもいいイメージを持っていて……完璧な子供だと思っていたんです」(182) と愚痴をこぼしている。

家父長制は父親だけが支えているのではなく、母親もまた、その協力者として振る舞うことがある。少なくとも、思春期の少女たちの目にはそのように映ることがあり、その結果、少女たちはより一層孤独感を深めることになる。そして、そのような孤独感を通じて、少女たちは、まさにアンネが自分用と公開用の二種類の日記を書き分けたように、公的な声と私的な声の使い分け—あるいはギリガンの言葉を使えば「<sup>ダブル</sup>二重化」—を体得するようになるのである。

例えば、授業で英雄譚を書くように言われた一四歳のアンナは、二種類の作文を用意し、ひとつは「かつて人類を救ったタイヘンリッパな英雄がいましたってやつ」(164) を、もうひとつはヒトラーに憧れる少年の視点から英雄としてヒトラーを描いたものを提出したという。

しかし、ここで急いで付け加えておく必要があるのは、ギリガンが思春期の少女たちの中に見ていたのは、必ずしも敵対的な母娘関係ではなかったということである。例えば、先ほど名前を挙げたロージーにしても、実際は母親との良好な関係性を望んでいた。恋人との関係をめぐって母親と揉めたときも、彼女は「口喧嘩とかそういうのじゃなく」、「向こうがどう思っているのか聞きたかった」(182) のだと述べている。アンネが日記の中で私たちに伝えようとしていたのも、まさにそのような母娘関係の連帯の可能性である。彼女の日記には、母は母で、娘の変化に戸惑いながらも娘とのあるべき関係を取ろうとしていたこと、そして娘は娘で、そのような母の気掛かりに気づいており、母との連帯の可能性を模索していたことが記されている。

例えば、一九九八年に、新たにアンネの日記の五ページ分が発見されているが、その中でアンネは次のように書いている。これは、そのまま第四章の中で引用されている部分でもある。

「ことによると、お母さんがまわりのみんなにとげとげしい、無愛想な態度をとるようになったのは、これまであまりにも多くを堪え忍んできたせいかもしれません、あいにくそれは確実にお母さんを愛される人柄から遠ざけ、敬愛の念をかきたてにくくしているのです。そのうちいつかはお父さんも、否応なく気づかされることになるでしょう——お母さんが、うわべだけではけっしてお父さんの全面的な愛情を要求することなどなくても、そのじつ内心では徐々に、しかし確実に、ぼろぼろになってゆきつつあることに。お母さんは、ほかの誰よりも深くお父さんを愛しています。そしてこの種の愛情が報いられないのを見せつけられるのって、とてもむごいことだと思います。」<sup>15</sup>

ギリガンはここに、母の側に立ち、母を擁護するという、これまで見落とされていたアンネの姿が示されていると述べる。父の検閲があったために、それは見落とされてきたのだが、まさにそのような父の暴力に対して、「アンネは自らを抵抗者として位置づけているのだ」(180)とまでギリガンは主張した。

この新たなページを含む校訂版が英訳されるのは、二〇〇三年のことである。この発見が、昔に書いた論文を二〇年近くも経ってから、『抵抗への参加』に収めるために、ギリガンがもう一度書き直した主な理由とまでは言わなくとも、理由の一つであったことは間違いない。少なくとも、このときになってギリガンは初めて、「女同士を競合関係に置くことのない女たちの物語が、わたしたちの耳に届きにくいという現実」(180)に気づかされたという。

ここまで書けば、一見自由奔放に見える彼女の研究のスタイルが、明確な問題意識に基づいていることが、すでに明らかになったのではないかと思われる。ギリガンは、聞き取り調査だけでは聞き取ることが難しく、テキストだけからは読み取ることの難しい、思春期の少女たちの隠された声を、心理学と文学を結びつけることで、いわば学際的でメディア横断的な方法を用いることで、浮かび上がらせようとしたのである。

## まとめ

『抵抗への参加』の序文で、ギリガンは彼女の調査対象者である一一歳の少女と向き合うなかで、「見たままを口にできず、知っていることを考えることもできないでいる状況にこどもたちが抵抗を示すとき、それを抑え込む側に自分が加担していた」(8) 事実に気づいたことを告白している。

彼女の言葉尻を捉えては疑問を投げかけてくる少女に対して、ギリガンは「言葉を額面通りに受け取りなさい」と述べたことで、インタビューをスムーズに進めることには成功したが、その後の少女は、ただ相手の言うことを理解しているかのようにふるまうだけになったという。

自らの研究を進めていくためにも、ギリガンは自身の内部で大きな位置を占めていた「父の声」と向き合わねばならなかった。

<sup>15</sup> アンネ・フランク『増補新訂版 アンネの日記』深町眞理子訳、文春文庫、2003年、320頁。

そうしたなかから、「自由連想法」を用いた自己の「解放」の試みが生まれることになる。その最初の試みの一つとしてあったのが、一九九〇年に行われた「タナー講義」での講演である。これは、のちに改稿され、『抵抗への参加』の第四章に取められることになる。そして、その途上で彼女は、繰り返しフロイトの著作を読み、『アンネの日記』との出会い直しを重ねている。

やがてギリガンは、フロイトには連帯者と抑圧者の両方を、アンネには家父長制に対する「抵抗者」を発見することになるが、それは同時に、心理学者としてのギリガンが、少女たちの連帯者でありうると同時に抑圧者でもありうる自らを発見し、少女たちの声に抵抗を聞き取ってゆくプロセスとしてもあったのである。

『抵抗への参加』の共訳を引き受けたとき、まさか自分がギリガンについて書くことになるとは思ってもいなかった。しかし、今回こうしてギリガンの文章を読み直したことで、改めて気付かされたのは、彼女の仕事は、内容と表現が密接に結びついているということである。

そもそも、自らが内部に埋め込んだ「もうひとつの声」（本当は知っているのに知らない自分の声）に言葉を与えようとする彼女の試みは、表現の問題と向き合わざるをえないものであったとも言える。ギリガンも引用しているヴァージニア・ウルフの言葉を借りれば、「あたらしい言葉を見つけ、あたらしい方法を創り出す必要があった」<sup>16</sup>がゆえに、彼女は「自由連想法」にも頼れば、小説を書きもした。『抵抗への参加』とは「新しい表現行為への参加」に誘う書であるとも言えるかもしれない。

最後に、私は文学を研究する者として、とりわけ創造的に書くということの政治的な意味について、ギリガンから多くを学ばせてもらったことを、ここで言い添えておきたい。

(たなか・もりやす)

---

<sup>16</sup> 『抵抗への参加』104頁。これは、ヴァージニア・ウルフが『三ギニー』（1938）の中で書いた有名な一節からの引用である。その直前はこうなっている。「戦争を阻止するためのわたしたちの最善の手助けとは、あなたがた（男たち——引用者）の言葉を繰り返し、あなたがたの方法に従うのではなく、新しい言葉を見つけ、新しい方法を創造することです」（片山亜紀訳、平凡社ライブラリー、2017年、262頁）。